

映画に見る伝承

木田 裕美子

Various Motifs from Folklore in Films

KIDA, Yumiko

Abstract

One motif or theme found in the Bible, Greek and Roman myths, folktales and legends is followed by contemporary people. Storytellers from ancient times to the present have used the same motif in stories as in stories found in Genesis in the Bible and Greek myths: the creation of earth, Adam and Eve, Cain and Abel, Moses and Christ, dragon slayers, blacksmith, the mortals who turn into the immortals. Today we find such various motifs in the films like "Samson and Delilah," "The Chronicles of Narnia, the Lion, the Witch, and the Wardrobe," "Lord of the Rings," and so on.

This paper will illustrate how such symbols as rings, hair mean and a mortal who once turns into an immortal should die.

Keywords: Symbols in traditional works; hair, lion, immortality

はじめに

神話、伝説、民話、聖書などの伝承は、多くの作家や詩人、作曲家、画家や彫刻家、映画の製作者などの芸術家達にそれぞれの創作の題材を提供してきた。彼らが読み解き、想像した神話の世界や伝説を、作家や詩人は文字で、作曲家は太古から人々の心臓の鼓動にあったリズムで、画家や彫刻家は、神々の姿や伝説の物語を目の前に描きだし、また、映画制作者は、動く映像を使って伝えている。現在を生きる者は、文字を見、或いは耳で聞いた西洋文化の源を形成してきた聖書、神話、伝説などの伝承を、自分自身の体験に基づいて頭の中に描いていたものと、先人の描いた絵画や彫刻とを比較することもでき、より詳細な知識を得ることができる。動く映像を用いている映画では、静止している彫像や絵画とは違う観点から、気軽に楽しみながら西洋文化に触れることができるようである。

映画製作者に題材を与えてきた聖書、神話、伝説と言った伝承の中の話は、映像を作り出すものが自分の技術を試す格好の題材を提供しているともいえよう。『十戒』の海が左右に分かれ、モーゼとイスラエルの人々が紅海を渡ると海の水がまた満ちる場面、ナイル川が血の色に染まる場面がある。最近では、映像化が不可能だとされていた『指輪物語』も映画となって、中つ国の様子を観客に紹介している。『十戒』のほかにも聖書や神話の中の話をもそのまま映画化したものには、『聖衣』『パッション』『サムソンとデリラ』『キング・デイヴィッド』『アルゴ号探検隊』などがあり、聖書や神話に現れる人物像ばかりでなく、当時の儀式や日常使われていた道具、風俗、風景も知ることができ、製作者、脚本家、監督のような他者の解釈をも目のあたりにすることができる。また、ファンタジーや魔法を題材とした物語の中には、聖書にある事柄や、神話や伝説で語り伝えられてきたモチーフが繰り返し現れる。このような題材を利用する映画は、古を伝える現代の語り部の役割を果たしているといえよう。初めは、言葉で語られ、語る人の解釈や即興的な創作を加えて伝えられた物語や唄が、次に文字となり、印刷され、より多くの人が同じ内容

の物語、唄を共用することができるようになり、更に現代の語り部とも言える映画が地球上の広い範囲にわたり映像でわかりやすく、人々に伝承している。

本稿では、聖書や神話、伝説の中の象徴やモチーフが主に映画の中やその原作、またその他の作品の中でどのように現れているかを例証するものである。

指輪

20世紀初頭に生きたトールキンと、C.S. ルイス。2人はそれぞれファンタジー作品『指輪物語』3部作、『ナルニア国物語』7部作を出版した。映画も21世紀にはいつて、『指輪物語』3部作、続いて『ナルニア国物語』の第1章が公開された。前者には、ゲルマン・北欧伝説『ニーベルングの指輪』の、後者には、キリスト教の影響が濃くみられる。

『指輪物語』と『ニーベルングの指輪』の指輪は、人間の権力や黄金へのあくなき欲求の象徴とされている。指輪はその形から、完璧な和を表している。また、束縛されている奴隷の身分を表すと共に、身分の高い人をも表すと考えられている。『ニーベルングの歌』の指輪は、豊饒を表すといわれている。

『ニーベルングの指輪』の主人公ジークフリートは竜が守っていた指輪を盗む。正統な持ち主ニーベルング族の亡霊たちが忠告したにも関わらず、盗んだのである。『指輪物語』では、ホビット族のフロドが3人の仲間と共に、邪悪な指輪が生まれた場所へと戻しに行く。それは、まるでジークフリートが奪った指輪を戻しに行くかのようなのである。

さて、2004年製作の映画『ニーベルングの指輪』の冒頭、「時代は今から1500年前、ヨーロッパの国々では既にキリスト教が信じられており、北欧の人々だけが、オーディンを長とする神々を信じ、そこに人々の心を魅了する物語が生まれた」と解説が流れる。自然の力が強く、竜や不死身の人間が存在していると信じられていた時代である。

映画『ニーベルングの指輪』は、ジークフリートの幼い頃、両親が殺される場面からはじまる。敵の手を逃れた彼は川の中を漂っている時、鍛冶屋に救われる。この場面は、

モーゼが川に流され、エジプトの王女に拾われる話を、また、炎で鋼を支配する鍛冶屋が作り出す刀に名前をつけ、自分の刀とする場面では、アーサー王とエクスカリバーを髣髴とさせる。さらに、竜を退治したジークフリートは、不思議な声の指示に従って、竜の血を体にかける。場所は、暗い森の中だった。はらりと落ちてきた菩提樹の葉が張り付いた肩には竜の血がつかず、その部分だけが死すべき人間の体のままで残ってしまった。これは、ギリシャ神話のアキレウスが不死身となるようにと、母親が赤ん坊の頃に踵をつかみ、火にかざした（冥土に渡る川に浸したとも言われている）ため、踵だけが、不死身にならなかったことと一致する。トロイ戦争の最中、パリスの放った矢に踵を射抜かれてアキレウスは死んでしまう。細い矢で殺されるのは、アキレウスばかりではない。北欧神話の光の神、バルドルも、ヤドリギで作られた矢で殺される。北欧の神々は、人間と同様死ぬ運命を背負っていた。バルドルの母親フリッグは、世界中の生物、無生物に彼を傷つけないでほしいと頼み契約を交わす。しかし、ヤドリギは若く、契約を理解しないだろうとフリッグは考え、頼まなかったため、バルドルの唯一の弱点になった。そのため、ロキの陰謀にあい、ヤドリギで作った矢で射抜かれ命をおとしてしまう。

映画の中のジークフリートは、槍で背中を貫かれて命を落とす。映像では、彼の肉体が滅びるとき、彼が殺した竜のもだえ苦しむ姿も重ねて描かれた。ゲルマン神話では、彼は墓地に埋葬されるが、映画では、遺体は、竜の頭蓋骨を舐につけた船に乗せられ、水上で火葬にふされる。

指輪の最後については、ゲルマン神話では触れられていない。映画では、妻のクリムヒルトが指輪をはずすと、グンター王と家来のハーゲンの中で指輪の奪い合いが始まる。グンター王は殺され、ハーゲンは、ブリュンヒルデの刃に倒れる。そして、指輪は、ジークフリートの指に再びはめられる。クリムヒルトの「ニーベルングの人々に戻すように」との言葉と共に。

ライオンとキリスト像

C.S.ルイス原作の『ナルニア国物語第1章ライオンと魔女』の映画に登場するナルニア国の王アスランは、なぜ、ライオンの姿をしているのであろうか。ライオンは百獣の王であること、また、その鬣の故に勇敢な姿に見えるのである。さらに、古い言い伝えによると、ライオンは死んで生まれ、3日後に父ライオンから息を吹き込んでもらって命を得る、とされていたことから、キリストが人類の罪を背負って十字架にかかり、3日後に復活したことになぞらえているからである。

さて、『ナルニア国物語第1章ライオンと魔女』の映画では、第2次世界大戦時にロンドンから田舎へ疎開した4人の兄弟姉妹が滞在している教授の家の「洋服ダンス」を通過してその向こう側にある別世界を冒険する。「洋服ダンス」は、『不思議の国のアリス』のアリスが別世界に紛れ込む際に通過したウサギの穴の役割をし、現実世界と別

世界との通路として設けられている。

4人が訪れたナルニア国では、カイルを捕らえた雪の女王のような白の魔女が君臨し、善なるものが否定され、冬が世界を覆っている。その様子は、バルドルの死後のフィンブルヴェドの状態、厳しく怖い冬が続き、人々はモラルを失い、生き物は死に絶える世界の世界である。そこに、アダムとイブの末裔と呼ばれる4人が、まるで救世主のように侵入する。しかし、真の救世主は、ナルニア国の王、アスランと言う名のライオンであった。原作者は、このアスランに人間の贖罪を背負い十字架にかけられるキリストの像を重ねている。このアスランがアダムとイブの子どもたちの一人エドモンド（キリストを裏切ったユダと考えられている）の代わりに殺される場面では、魔女が「辱めるために鬣を切れ」と命令する。

ライオンはその鬣の見事さのゆえに、強く見える。鬣を切られたライオンはどのように見えるのだろうか。また、人間の髪はどのような意味を持っていると考えられていたのであろうか。

髪

人間の体の一部で、成長することが目で確認できるのは髪の毛と爪であろう。

昔の人々の髪型については、彫刻や絵画である程度確認できる。例えば、ローマ皇帝たちや、カエサルのような軍人は髪を短く刈っていた。エジプトの王たちのように鬘を着用している例もある。

髪が象徴するものは何であらうか。『宗教学辞典』には、「毛髪が人体の一部であることから、その所有者個人との間に何らかの関連があるとする信仰」があり、「髪型の変化は、その人間の地位や状態の変化を象徴的に示すものとして、服喪、イニシエーションなどの通過儀礼において、その重要な要素となる。」と記されている。世界各地の民間伝承を集めたフレイザー卿の『金枝編』にも、未開の民族が髪に対して抱いていた考えが記述されている。天地創造からローマ建国までを描いたオウィディウスの『転身物語』に、登場するメデューサのもつれた蛇の髪、アポロンから逃げようとしたダフネの風になびく髪はどのような意味を持つと考えられたのであろうか。

際立った髪を持つ人物は、ギリシャ神話に登場するメデューサ、旧約聖書に登場するサムソン、それに『サー・ガーウェインと緑の騎士』に登場する緑の騎士である。

髪と髪の色

緑の騎士は、全身が緑であるばかりでなく乗っている馬までも緑の異様な風体でクリスマスの晩餐会を催しているアーサー王の宮廷に乗り込んでくる。彼の風体は、全身緑、目は血走っているように見える赤である。緑の騎士は、晩餐会に居合わせた騎士達に次のように挑戦する。緑の騎士の首を斧で断ち切ることを、騎士の首を断ち切った者は、その首を斧で切られるため、翌年のクリスマスに騎士の城を訪れるようにと。誰も彼の挑戦を受ける者がいないのを見

てとると、緑の騎士は、アーサー王の騎士達をあざ笑う。ついに、アーサー王の騎士達の中でも、最も誠実な騎士とされたサー・ガーウェインが名乗りでる。物語の終わりに、読者は、緑の騎士が実はクリスマスに現れた再生の象徴であることがわかる。次に、Penguin Classics の *"Sir Gawain and the Green Knight"* 179-186 に騎士の髪について記述されている箇所を引用する。(下線は筆者)

Yes, garbed all in green was the gallant rider,
And the hair of his had was the same hue as his horse,
And floated finely like a fan round his shoulders;
And a great bushy beard on his breast flowing down,
With the heavy hair hanging from his had,
Was shorn below the shoulder, sheared right round,
So that half his arms were under the encircling hair,
Covered as by a king's cape, that closes at the neck.

上記の描写から、映画『ハリー・ポッター・シリーズ』に登場するハーグリッドの髪を少し切り詰めた姿や、髪型とひげの生え方からサンタ・クロースの姿との類似もみられる。

この『サー・ガーウェインと緑の騎士』に登場した緑の騎士は、サー・ガーウェインの誠実さを試す試練の旅に誘う精霊のような存在である。サー・ガーウェインは、緑の騎士の館にたどり着くまで様々な苦難や誘惑に打ち勝ちながら、旅を進める。そして、最後の試練、領主(緑の騎士)の妻の誘惑を退け、約束どおり、首を緑の騎士の前に差し出す。彼の誠実さを褒め称えた緑の騎士は、サー・ガーウェインをアーサー王の宮廷に戻すのである。

この緑の騎士は、クリスマスに現れたこと、緑の色が平和と再生を表すことを考えると、異様な風体をしていても、悪魔の化身とは思えないのである。同じく緑の髪を題材とした反戦映画 1948 年製作の『緑の髪の少年』がある。『緑の髪の少年』では、戦争で親を亡くした少年ピーターが親類中をたらいまわしにされた後、祖父との生活を始める。ある日目覚めると髪が緑になっていた。彼は、なぜ緑の髪になってしまったのか理由がわからず、また、周囲の人々から嫌がらせを受け、奇異な目で見られ、一人悩むが、森の中で出会った不思議な子どもたちの言葉を聞き、髪が緑になった理由がわかり、自分の使命に目覚めるのである。

次は、戦争孤児のポスターに載っていた 9 人の子どもたちと緑の髪の少年ピーターとの会話である。ピーターは、森の中に逃げ込み、一人で泣いていると、いずこからともなく 9 人の子どもたちが現れる。P はピーターである。

Boy1: It is a boy with green hair. We are waiting for you.
P: You mean I'm supposed to come?
Boy 1: We're hoping you would.
P: What for?
Girl 1: Your green hair is very beautiful.
P: Beautiful?!
Girl 1: Yes. Green is the color of spring. It means hope.
P: A promise of a new life to come.

Boy 1: About your hair. Did people take notice of you?

P: Did people take notice of me?

Boy 1: We thought they would. But why were you crying?

P: Because...

Boy 1: Why?

P: Just because when you cry, you woke up in the morning for no reason at all you've green hair?

Boy 1: No. I would not cry.

P: You wouldn't?

Boy 1: No. Because there's a reason for your green hair.

P: A reason?

Boy 1: Yes!

P: A real reason?

Boy 1 ほかの 8 人の子供達を見渡して

Boy 1: He did not know.

P: Can you tell me?

Boy 1: It is a mark of something good, like a medal.

P: A medal?

Boy 1: There's no one else in all the world with green hair.

P: I know. I'm making a medical history.

Girl 1: It is hard to have green hair?

P: I don't wanna be different. I wanna be like everybody else.

Boy 1: If it's too hard to have green hair, you don't have to.

Girl 2: But that, of course, nobody will notice you. Nobody will ask you why you have green hair.

Boy 1: Everywhere you go, people will say, they will say there's a boy with green hair and then people will ask, "Why does he have green hair?" So, you will tell them, "Because I am a war orphan. And my green hair is to remind you that war is very bad for children." You must tell all the people: the Russians, Americans, Chinese, British, French. All the people, all over the world and that there must not ever be another war.

P: Gee.

Boy 1: If enough people will believe you, there never will be another war and there never will be any more war orphans.

P: But they don't know that. They think everybody has to get killed. The world doesn't have been blown up. I gotta hurry. I'll tell them. I'll tell everybody.

と叫びながら、緑の髪の少年ピーターは、森から走り出る。バラッドの世界では、森は、何か不思議なことが起きる場所、魔界の世界なのである。その森の中で、姿を現した 9 人の子どもたちは、ピーターが単に見た幻影か、戦争で亡くなった子どもたちの幽霊か、戦争に反対する人々の良心の具現化なのであろう。ピーターは、その後、ひときわ目立つ緑の髪を旗印に、人々に戦争の悲惨さを訴えて回るが、周囲の無責任な憶測と圧力に負けて、髪を剃ってしまう。しかし、精神科医や祖父の励ましを受け、更に亡くなった

父親の遺書を読むと自分の使命を思い出し、再び緑の髪が生えることを望む。この映画の中では、マザーグースの *How many miles to Babylon?* の変え唄も登場する。Babylon は、Babyland の転化したものと言われ、故郷や平和な子供時代を象徴している。

世界各地の伝承や言い伝えを集めたフレイザー卿の『金枝編』にも、髪が魔力を持つと信じられている例が紹介されている。髪が魔力あるいは不思議な力を持つとすれば、髪を切れば、完全に魔力が消えてしまうのであろうか。

イスラム教では、髪の一部を残して、そってしまうのは、神がそこをつかみ、天にひきあげてくれると信じたからである。アメリカインディアンもやはり髪の一部を残しているが、敵の頭皮をはがすのに都合がよかったとのことである。僧侶は剃髪し、囚人は髪を切られる。髪の一部の色が違い、その部分を切りとるとその人物の死をもたらすと共に国が減びると信じていた例が、オウィディウスの『転身物語』の中にある。

髪の一部の長さや髪に力が宿っていたと信じられているなかでも、最もよく知られているのは、旧約聖書、士師記 13 章～16 章に登場するサムソンであろう。

サムソンは、ヘブライ版太陽神だといわれ、彼が頭髪を失うことは、太陽の力が弱る秋から冬の季節を指していると考えられた。また、サムソンに関しては、素手でライオンを殺したこと、そのライオンと蜂蜜からパリシテ人に謎かけをしたこと、デリラに髪を切られ、力を失ったサムソンは、目もつぶされ、地下の牢獄で碾き臼をひかされ、最後に異教の神殿の柱を崩壊し、自らの命も絶ったことが記されている。

怪力サムソンが、デリラに自分の怪力の秘密を打ち明ける場面は、聖書では次のように記されている。記述からは、天使がサムソンの母親と約束（契約）を結ぶことから始まり、その契約が子であるサムソンにも有効であるとわかる。

Judges 16-17 That he told her all his heart, and said unto her, There hath not come a razor upon mine head; for I have been a Nazarite unto God from my mother's womb; if I be shaven, then my strength will go from me, and I shall become weak, and be like any other man.

チョーサーの『カンタベリー物語』に登場する修道僧もサムソンについて語っているが、サムソンの武勇伝を強調し、デリラに力の秘密を打ち明ける箇所は聖書同様短く語っている。

次の会話の引用は、1949 年のアメリカ映画『サムソンとデリラ』のサムソンがデリラに自分の強い力は、髪にあるとほのめかす場面である。彼が、「ライオンと蜂蜜の謎かけ」をしたように、謎をだすようにデリラに語っている。聖書やチョーサーのように直接的に解答を出していないのである。S はサムソン、D は、デリラを指す。

S: The moon light's in the west by night, the sun lights by day is not by chance. In the beginning, there was only darkness until

one great power created light and shaped the earth and all the things to live upon it.

D: Your invisible god?

S: My strength comes from Him.

D: How does his power reach you? Is He here with us now?

サムソンは、まず、神の力を語り、その神から自分は力を授かったと述べる。

D: Will you have all your strength?

S: As long as I keep faith in Almighty. Long time ago, I was dedicated to Him. Many of the vows I've broken, but one I've kept.

D: A vow has made you strong?

S: That's much more than that. Do you remember the lion I killed?

D: I'll never forget.

S: Strength of a lion makes him king of beasts. A rough mane is a mark of his power. A man in the desert knows the long flowing mane of a stallion is the mark of his power. Among my people, they say the strongest lamb has the heaviest wool. If it be sheared, shield of strength is gone. You see the eagle climb the sky, but if you took two prime feathers' tips of one wing, mighty eagle can no longer fly. The mark of his power is gone.

D: The mark of his power. Samson, this is the mark of your power. It's your hair. If it were shorn from your head,

S: I'd be as weak as any other man.

D: You believe that your great god has given you a strength through your hair? You do believe that, don't you?

謎を解いたデリラは、眠っているサムソンの髪を切る。髪を切られたサムソンは、怪力を失ったばかりでなく、目もつぶされたことでも、去勢されたと考えられている。しかし、髪は切られても伸びるものである。髪が元の状態に戻った時、サムソンは怪力を取り戻す。

ところで、サムソンの髪の色は何色だったのだろうか。映画『サムソンとデリラ』の中で、デリラが、「鳥の翼のように黒い」と表現している。

ライオンと鬘

サムソンがライオンの強さは、その鬘にあると言ったように、ナルニア国の王アスランは立派な鬘を持ったライオンとして描かれている。そのアスランがアダムの息子エドムンドとの命と引き換えに白の魔女にとらわれる。

アスランが白の魔女の家来に縛られ、生贄を捧げる台に引きずられていく場面では、白の魔女の家来たちがアスランをあざ笑う様子やアスランの崇高な態度が次のように *"The Lion, The Witch and the Wardrobe"* p.178 に記されている。その様子は、キリストの生涯を描いた映画の中で、キリストがゴルゴタの丘に十字架を背負って歩いていく情景と重なる。（下線部は筆者）

The Hags made a dart at him and shrieked with triumph when

they found that he made no resistance at all. Then others- evil dwarfs and apes- rushed in to help them, and between them they rolled the huge Lion over on his back and tied all his four paws together, shouting and cheering as if they had done something brave, though, had the Lion chosen, one of those paws could have been the death of them all. But he made no noise, ..

そして、鬣を切られたあとは、Then the ogre stood back and the children, watching from their hiding-place, could see the face of Aslan looking all small and different without its mane. The enemies also saw the difference.

鬣のないライオンは、小さく、力のない「大きな猫」に見え、もはや王たる威厳はないのである。

次に、映画『ナルニア物語』の同じ場面を紹介する。

大きな石の台に引きずりあげられるアスラン。その台の後方には鳥居のような造形物と周囲には巨石の柱が並んでいる。アスランの後をつけてきたイヴの娘たちと呼ばれるスーザンとルーシーは、物陰から、様子を見ている。

Creature: (アスランに向かって) You want some milk?

Lucy: Why didn't he fight back?

Witch: Bind him! Wait!

Let him first be shaved. Bring him to me.

Now Aslan. I'm a little disappointed in you. Did you honestly think by this deed you could save a human traitor? You're giving me your life and saving no one.

So much for love.

そして、鬣を刈られたアスランを a great cat と呼び、ナイフでアスランの命を奪う。このアスラン殺害は、夜行われた。魔法の力は、日の入りから日の出まで働く。次に、魔法は、ナルニア国を完全に自分のものにするためアスラン軍に戦争を挑む。魔法の軍隊には、ミノタウルス、北極熊、小人、巨人と言った、神話の中でも悪を代表する創造物。一方の軍隊は、一角の馬に乗ったピーター、火の鳥、ケンタウロスが参加した。

さて、白の魔法がアスランの死体をそのまま石の台に残し、戦場に赴いている間に、スーザンとルーシーは、アスランの死を確かめ、涙にくれる。2人が泣いていると、ねずみが現れ、アスランが縛られている縄をかじり取る。

アスランが死から復活する場面は、映画では台座が音を立ててひび割れると、昇る太陽を背にし、二本の柱の間に、すっと立ち上がった姿で表現されている。鬣は、もちろん、王者の風格にふさわしい状態に戻っている。映画の復活の場面よりも原作では、ゆっくりと時間をかけてアスランは復活する。It was quite definitely lighter by now. Each of the girls noticed for the first time the white face of the other. They could see the mice nibbling away; dozens and dozens, even hundreds, of little field mice. And at last, one by one, the ropes were all gnawed through.

The sky in the east was whitish by now and the stars were getting fainter—all except one very big one low down on the

eastern horizon. They felt colder than they had been all night. The mice crept away again. ("The Lion, The Witch and the Wardrobe" p.187)

ルーシーとスーザンは、明け方の寒さを避けるため体を動かしていると、「巨人が大きな皿を割ったような」耳をつんざく音を聴く。そして、アスランの復活を目撃する。その場面を原作では、(ditto p.190) There, shining in the sunrise, larger than they had seen him before, shaking his mane (for it had apparently grown again) stood Aslan himself. 復活の理由を Aslan は次のように言葉を続ける。

"It means," said Aslan, "that though the Witch knew the Deep Magic, there is a magic deeper still which she did not know. Her knowledge goes back only to the dawn of Time. But if she could have looked a little further back, into the stillness and the darkness before Time dawned, she would have read there a different incantation. She would have known that when a willing victim who had committed no treachery was killed in a traitor's stead, the Table would crack and Death itself would start working backward. And now_" (ditto. P.191)

映画のアスランは復活を次のように説明する。

If the witch knew the true meanings of sacrifice, she might've interpreted the deep magic differently. And when one willing victim who had committed no treachery was killed in a traitors' stand, the stone table cracked. And even the death itself returns backward.

ライオンのアスランが復活する場面には、原作では、何百匹ものねずみが、映画では、数匹のねずみが登場し、アスランを縛っているロープを噛み切る。この場面からは、イソップの寓話集、「ライオンとねずみ」が連想できる。また、復活の場面を目撃したスーザンとルーシーという二人の女性性は、イエスが復活した場所に居合わせた二人のマリアを連想させる。

その他の髪

映画『サムソンとデリラ』『緑の髪の少年』『ナルニア国物語』の中で描かれた髪が象徴するものは、映画制作者という現代の人々の解釈が加えられている。一方で、オウィディウスの『転身物語』では、ローマ時代の人々が考えていた髪の象徴するものが推測できる。『転身物語』の中では、第1章の世界創造に始まり、トロイ戦争、カエサル登場に続く、第15章のローマ建国まで、「髪」と言う言葉が、haire のつづりで68箇所、heare, のつづりで83箇所に現れる。

まず、髪を切ることがローマでは服喪や悲しみを表した。トロイ陥落の際、王妃ヘカベは、髪を切り落としヘクトルの墓に供える様子が、第13巻に次のように記されている。引用部分は、シェイクスピアと同時代の Golding の英訳による Ovid の *Metamorphoses*。(下線は筆者)

13 巻: 512-514

Yit raught shee up, and in her bosom bare

Away a crum of Hectors dust, and left on Hectors grave
Her hory heares and tears, which for poore
 offsprings shee him gave.

髪型では、束ねていない髪は、処女性、髪を振り乱すのは、狂乱と激しい悲しみ。一房の髪は、それを失うと生命や王位を失うという象徴が現れている箇所を引用する。

まず、月桂樹に姿を変えられたダフネの髪の色、結わえられていない髪が風に吹かれる様子を、第1巻: 643-644で次のように表現している。(下線は筆者)

Hir goodly yellowe golden haire that hanged lose and slacke,
With every puffle of ayre did wave and tosse behinde hir backe.
 次は、第1巻 659-664の、ダフネがアポロンに追いかけられている場面の彼女の髪の様子である

So fared Apollo and the Mayden: hope made Apollo swift,
 And feare did make the Mayden fleete devising how to shift.
 Howbeit he that did pursue of both the swifter went,
 As furthered by the fathered wings that cupid had him lent,
 So that he would not let hir rest, but preasedd at hir heele
 So neere that through hir scatted haire she might his breathing
 feelee.

次は、髪の一部が他の部分と違っている例である。王ニスは、髪の一部の色が他の部分と違って、その部分を取り去られない限り、王国は安泰であると考えていた。

第8巻 8-13 (下線は筆者)

... And first he thought it meete
 to make a triall of the force and courage of his men
 Against the towne Alcathe where Nisus reigned then.
Among whose honorable haire that was of colour gray,
One scarlet haire did grow upon his crowne, whereon the stay
 Of all his Kingdome did depende.

ニスの娘スキラは、父の敵ミノス王に恋し、父の緋色の髪の一部を切り取って、ミノス王に差し出す。

髪の一部が緋色である様子から、シャルル・ペローの「とさか毛のリケ」が連想される。リケは、頭はよいが、醜い男性である。鶏冠のような髪型をしていたとか、色が鶏冠のように赤かったのかは、不明ではある。伝承童謡マザーグースにある髪を歌った2つの唄のうち、額の真ん中に巻き毛のある女の子は、機嫌が悪いと手のつけられない状態になる。

終わりに

本稿では、神話、伝説、民話の中の様々なモチーフが時代を超えて、物語や映画の中に連綿として使われ伝えられてきていることを例証した。また、聖書やギリシャ・ローマ神話ばかりでなく北欧神話に登場する神々や出来事、そこに現れる象徴的な事柄や物は、人々の創作意欲を鼓舞し、英語文化圏で製作された映画、『サムソンとデリラ』『アルゴ探検隊』『十戒』『聖衣』『パッション』『ニーベルングの指輪』『スターウォーズ』6部作、『マスク』『マスク2』『インディジョーンズシリーズ』『指輪物語』3部作、

『ナルニア国物語』、そのほか一連のアーサー王に関する映画などにも同じモチーフが見られる。

多くのモチーフの中でも顕著なものは、ギリシャ神話に見られる英雄の出生と成長のモチーフ。父王が実子に殺されるという予言を聞き、わが子を殺そうとする。母親はわが子を自分で隠すか、他人の手に委ね、国から脱出させる。しかし、運命は、その子が様々な試練を克服した後、本来の地位(王位)につくことを定めているというモチーフは、モーゼ、ジークフリート、アーサー王、トロイ戦争を引き起こしたパリス、スフィンクスの謎を解き、実母と結婚してしまったオイデプスに共通している。実の親はいるが、何らかの理由により、親とは違う大人(パリスは熊)が育てる。そして、長じて、自分の身分がわかり、その身分にふさわしい振る舞いをし、功績を立てると言う点である。不死身にはなったが弱点を持っており、些細な武器で死んでしまう共通点を持った英雄も存在する。アキレウス、ジークフリート、バルドルなどである。竜退治(怪物退治)もヨーロッパに伝わる英雄物語には欠かせないものであろう。ジークフリートばかりでなく、ギリシャ神話のイアソン、絵画に描かれているイギリスの聖ジョージなどの英雄が、困難なもの、人民を苦しめているものと闘い、勝利を収める筋書きが多い。日本のヤマタノオロチ退治にも共通しているようである。

髪に関わるものについては、『サムソンとデリラ』のサムソンの決して鋏を入れられたことのない黒髪、『ナルニア国物語』のライオンの鬣、『サー・ガーウェインと緑の騎士』『緑の髪の少年』の髪の色が緑である異様さ、髪が肉体的な強さや不思議な魔力を秘めていると信じられていることがわかる。

絵画や映画は、文字で異文化を読み解く上で、大いに助けとなっている。例えば、映像を見ると、ジークフリートの肩に落ちた菩提樹の葉の大きさ、その葉がどのくらいの部位を被ったか、その時代の衣装、鍛冶屋の仕事振り、甲冑の移り変わり、戦い方、サムソンが抱いていた石臼の大きさ、サムソンが破壊した宮殿、アスランが横たえられた台座、ナルニア国での戦いと中つ国の戦いの相違など、文字で伝えられる内容がより鮮明なものとなる。映画は映像で伝える新しい「語り部」の役割をしていると言えよう。

参考文献

- 1) 脇 明子:『魔法ファンタジーの世界』岩波新書、2006
- 2) ライナー・テッツナー:『ゲルマン神話』青土社、1998
- 3) ジェイナ・ガライ、中村風子訳:『シンボル・イメージ小事典』現代教養文庫 1990
- 4) C.S Lewis: *The Chronicles of Narnia, The Lion, The Witch, And the Wardrobe*, Kodansha English Library, 2001
- 5) Brian Stone ed.: *Sir Gawain and the Green Knight*, Penguin Classics, 1959
- 6) The Arthur Golding Translation of 1567, *Ovid's Metamorphoses*, Paul Dry Books, 1965.

(2007年10月12日 受理)